

東京まゆみ会会報

第36号 (令和6年8月)



まゆみの精神



強靱であれ その木の如く
しなやかであれ その枝の如く
清楚であれ その花の如く
誠実であれ その実の如く

東京まゆみ会

目次

あいさつ	東京まゆみ会	会長	佐藤富美夫	2
絆は世代を超えて	安達高等学校同窓会	会長	五輪美智子	3
語り継ぎ、言い継ぎ行かん安達のまゆみを	安達高等学校	校長	伊藤 勝宏	4
ご挨拶				
寄稿	東京まゆみ会	副会長	阿部伊勢吉(昭45)	5
百周年記念懇親会に参加して	東京まゆみ会	副会長	山田由美子(昭51)	5
沢山話し、良く笑う人生を！	安達高等学校同窓会副会長		鹿又いづみ(昭56)	6
特別寄稿	会 員		森 淳子(昭60)	8
平均寿命が全国で最も長い川崎市麻生区での私のお仕事	会 員		武田 晃司(平17)	10
博士というキャリアについて	会 員		菅野 育夫(昭51)	12
（高校・大学（院）・教員・研究者）				
特 集	東京まゆみ会事務局			14
写真で見る 総会・懇親会2023	東京まゆみ会事務局			16
東京まゆみ会のホームページができました	東京まゆみ会事務局			18
東京まゆみ会が福島民報で紹介されました	東京まゆみ会事務局			20
東京まゆみ会事務局より	東京まゆみ会事務局			21
東京まゆみ会則	東京まゆみ会事務局			22
令和五年度年会費納入者ご氏名	東京まゆみ会事務局			22
現在の役員体制	東京まゆみ会事務局			22
会からのお願い	東京まゆみ会事務局			22
編集後記	東京まゆみ会事務局			22

【表紙の写真】 2023東京まゆみ会 総会・懇親会

「絆は世代を超えて」

東京まゆみ会会長



佐藤 富美夫（昭和45年卒）

私は令和5年度総会において、高橋会長のあとを受けて会長に就任いたしました。

高橋会長には4年間にわたり会長を努めていただき誠にありがとうございました。

コロナ禍という非常に舵取りの難しい時期で、移動すること、集うことが大きく制限されたなか、会報の発行を続けられたことは大変素晴らしいことだと思います。また、会員の皆様には会報への執筆や近況報告など、ご協力をいただき御礼申し上げます。

昨年10月、安達高等学校創立100周年を祝う記念式典が開催されました。

10月14日には、東京まゆみ会総会・懇親会を4年ぶりに開催し、設立75周年記念の年でもあり、久しぶりの再会を祝い、アトラクションを交えて和やかに歓談しました。

これからも東京まゆみ会が盛会に続けていけるよう、皆さんと楽しい会にしていきたいと思います。

私と東京まゆみ会の出会いは、2010年、同期の阿部伊勢吉君（現副会長）からの誘いでした。13年前になりますが、

幹事会の案内がきて幹事に就任したと記憶しております。

このことが、高校の同窓会の何たるかを考えてみる良い機会になりました。

そして、この時から始まった先輩、後輩、同期の同窓生の皆様との付き合いが、今も人生の一部になっています。

「絆は世代を超えて」つながっていくのです。

世の中の変化は想定をはるかに上回るスピードで動いています。スマートフォンの普及、SNSの登場・拡大により人々とのコミュニケーションは新たな形、方法を生み出し、私たちはネット社会を無視して生活することは出来なくなっていました。

また、コロナパンデミックは人間の接触を大幅に制限したものの、人と人が対面で出会い、コミュニケーションをし、喜怒哀楽を分かち合うことの大切さを再認識する機会を与えてくれました。

人間同士は、絆やつながりの上に成り立っており、時には直接会うことで新たな発想・ひらめきも生まれてくるのではないのでしょうか。

今年3月に「東京まゆみ会」ホームページを開設しました。

今後の同窓会活動には、SNSの活用がより重要になると考え、新たな一步を踏み出しました。ぜひ、ホームページをご覧になってください。懐かしいあの人、あなたに会えるかも。

今年の総会は、10月12日（土）に開催されます。

顔を合わせ旧交をあたため合い、絆を深めましょう。

会員の皆様、同期の皆様をお誘い合わせの上、ご出席くださいますようお願い申し上げます。

「語り継ぎ、言い継ぎ行かん安達のまゆみを」

福島県立安達高等学校同窓会会長



五輪 美智子

令和五年十月二十八日、二本松市市民会館にて、三年かけて準備した創立百周年記念式典が挙行されました。開始のベルに続き、静まった会場に凱歌「安達野寂と夕こめて」が流れ、歌が終わるや緞帳が上がり、式典が始まりました。安達高校三年生の男女二人が総合司会をつとめ、生徒会副会長が開式の言葉を述べるや、会場からあたたかい大きな拍手がわき起こり、あれほど緊張していた副会長の顔がほころび、席に戻るセーラー服が輝いて見えました。

続く式辞・挨拶・祝辞にも拍手が送られ、今日という日を共に喜びお祝いしようという会場内の気持ちが一つになって、肅々と式典が進行してゆくのを目の当たりにして、私は「自分の足で歩いて通える学校が欲しい」との地元安達郡三町二十五村の篤い思いに応え、大正十二年四月十六日に第一回入学式を挙行してから百年の間、一日たりとも休むことなく、三万一千有余の生徒を迎え、見守り、送り出してきた我らの母校が、いかに卒業生に愛され、地域から信頼され大切にされてきたかを、改めて実感することができました。

記念事業の要であるメモリアル基金を贈呈し、お披露目も済んだ新校旗のもと、生徒会長が「伝統とは、受け継いだものを守るのではなく、より良いものとして、新しく創り出し伝える

ことです」と堂々と述べた言葉に涙したのは、私一人では無かったと確信しています。

式典終了後、スライドショーで「安達高校百年の歩み」を映像で楽しみ、福井トシ子氏（昭和五十一年卒）による「人生百年時代によりそう」の講演会を開催しました。講演後、生徒さんや会場から活発な質疑が相次ぎ、福井氏の説得力のある応答がある度、会場から歓声と拍手が起こり、講師と聴衆という垣根を易々と越える「同窓の絆」の力の有り難さを、感じました。式典当日は悪天候の予報で、学校から傘立てをお借りし、傘入れ袋を準備しましたが、有り難いことに、生徒さんや会場にお越しの皆様の行き帰りには、安達太良山の空の下、明るい日差しが差し込んでくれました。さらに夕方の祝賀会会場には、母校百寿を祝うかのように、見事な満月が空高く登り、感謝、感謝、感謝有るのみの一日でした。

令和六年三月一日、名残雪の中、百周年の歴史を刻んだ三年生が、各々の進路目標を達成して卒業し、二度目の春を迎えた「百年桜」が満開で迎えた四月八日には、創立百一年の記念すべき入学式が挙行されました。伝統の制服に身をつつむ新入生が入場するや会場に割れんばかりの拍手がわき起こりました。「新しい百年に向かって力の限り挑戦したい」との新入生代表の言葉と校歌「安達のまゆみ古しえの」が、身と心に染みわたりました。

同窓会は今年から従来の活動に戻りますが、より良い伝統の継続方法についてなど課題は山積みです。是非、東京まゆみ会の皆様のお知恵をお借し下さい。山部赤人の絶唱「語り継ぎ言ひ継ぎゆかむ富士の高嶺を」の如く、万葉の昔から歌に詠まれた「安達のまゆみ」を、一人でも多くの同窓生や地域の方々に語り継ぎ、言い継いで行きたいと思っております。

「い」挨拶

福島県立安達高等学校 校長

伊藤 勝宏



私は安達高等学校校長、伊藤勝宏と申します。本年で三年目となり、校長としても最後の年を迎えました。

昨年は、創立百周年の記念の年で、多くの記念事業が行われました。十月二十八日には、厳かな雰囲気の中、福島県副知事の鈴木正晃様や、本校同窓生でもあります福島県議会副議長の佐藤政隆様など多数の来賓のご臨席のもと、二本松市民会館において創立百周年記念式典が挙行されました。大変に感動的な式典となりましたことをご報告させていただきます。これも皆様のお蔭によるものと改めて深く感謝を申し上げます。

さて、昨年の本稿におきまして、安達高校の次の百年に向けた新たなスクール・ポリシーを作成中である旨を述べましたが、完成いたしました。内容は以下のとおりです。

1 グラデュエーション・ポリシー…教育目標

(卒業までに、このような生徒を育てます。)

- 自ら学び正しい判断力を持つ生徒を育てます。
- 誠実で忍耐強い生徒を育てます。
- 心身ともに健全でたくましい生徒を育てます。
- 地域社会とつながり、郷土に貢献できる生徒を育てます。

2 カリキュラム・ポリシー…努力目標

(高校では、このような教育活動を行います。)

- 基礎・基本の学習を尊重し、確かな学力を培います。
- 主体的・対話的で深い学びにつながる学習を展開します。
- ESDの理念に基づく探究型学習を行い、情報活用能力や課題発見・解決能力の育成に取り組みます。

○多様な進路希望に対応した個に応じた指導を丁寧に行い、生徒が自らの将来を開拓する力を身につかせます。

○国際理解教育と復興教育を軸としたESD活動や、生徒が行う特別活動、部活動等の充実努め、自己肯定感の醸成を図る取組を展開します。

3 アドミッション・ポリシー…志願してほしい生徒像

(高校では、このような生徒を求めています。)

福島県内の高等学校で最初のユネスコスクールである本校

百周年記念懇親会に参加して

東京まゆみ会副会長 阿部 伊勢吉 (昭和45年卒)



この度の安達高校創立百周年記念行事開催は、令和二年度から同窓会・PTA・学校関係者合同で記念事業実行員会組織を整えて準備されてきました。関係者のボランティア活動に総会に出席した同窓の一人として感謝を申し上げます。

私は安達高校を卒業して五十四年目にして百周年記念総会と懇親会に初めて参加しました。懇親会も各年次の先輩方、同年次、後輩方とは母校の思い出話と全員で合唱した凱歌などは、用意された美味しなお酒で大いに盛り上がりました。

東京まゆみ会からは安斎隆先輩、安藤勇夫先輩、神野宗介先輩、佐藤富美夫さん、山田由美子さんと私が出席です。

懇親会に参加して気づいたことですが、まゆみの精神「強靱であれ、しなやかであれ」は各年次卒の同窓生の心の奥深くに根付いていたことに感銘を受けました。

さて、東京まゆみ会も一九四八年に設立されてあと四年後には八十年を迎えます。首都圏在中の同窓生は減少しつつある中で、東京まゆみ会の維持と増強に向けて安達高校創立百周年記念行事を参考に組み組まなければならないと感じております。

沢山話し、良く笑う人生を！

東京まゆみ会副会長 山田 由美子 (昭和51年卒)



昨年十月二八日、二本松文化センターに入ると、会場では、達高生

全員が規律良く着座し始まりの時を待っていた。セーラー服と学ランがなんとも懐かしい・私にも周囲の大先輩方にもこんな時代は確実にあった。

生徒男女一人ずつの明瞭な司会進行のもと、五輪会長の素晴らしいご挨拶や、新調された校旗のお披露目等も滞りなく終了。

そして、昭和五一年度ご卒業、長きに渡り「日本看護協会会長」を務められ、現在は「国際医療福祉大学大学院教授、副大学長」にご就任の、「福井トシ子先生」の特別講演『人生百年時代によりそう』を一時拝聴した。四〇五名の生徒達が将来の事等に関する質問をして、そろそろ終了という時に、私は「ハイ!!」と手を挙げて、横にいた弟や隣席の同級生等のどよめきを聞きながら、マイクを手渡された。実行委員の方々の一方ならぬご労苦に対し、私は本部の常任幹事でありながら何もお役に立てなかったし、卒業生からの質問もあった方がより盛り上がるのでは、と勝手に思っていた。『ご講演を興味深く拝聴致しました。私は福井先生と同年ですが、先生は何か健康に良いことをなさってますか?』とお聞きした。「沢山の方と話し良く笑うことです。」と、にこやかに即答して下さった。

すると今度は、サービス精神旺盛な安斎隆東京まゆみ会顧問も「ハイ!」と来賓席から勢いよく挙手されて「私は訛ってないつもりでも周囲からは訛ってる、と言われます。福井先生はいかがですか?」と。会場でギョツとしてしていると「東京に住んで長いのに私もすぐに福島県出身と判られてしまいます。」凍りついた空気を一瞬にして春の陽だまりにしてしまわれたお人柄に、皆魅了された。

司会者の男子生徒の「僕もこれから沢山話し沢山笑う人生を送りたいと思います。」という、センス溢れる締め挨拶に、私は秘かに、にんまりしたのだった。

特別寄稿

「安達高校百周年記念誌を編集して」

安達高校同窓会副会長



鹿又 いづみ(昭和56年卒)

このたび東京まゆみ会様から会報原稿のご依頼をいただきましたが、どう書こうかと迷い、百周年記念誌の原稿依頼では皆様に「早くお願い」と催促までしたことも忘れ、自分は締め切りに間に合うだろうかとはハラハラしながら筆を進めております。

安達高校創立百周年記念誌の構想を話し合ったのはコロナ禍真っ只中の令和三年春のことでした。会報など数ページの印刷物の編集に関わったことはありましたが、「記念誌」とは一体なんぞや？と、わが校と他校のこれまでの記念誌を何冊も熟読、そして、副委員長の前田さんとネット検索までしたことも思い出されます。つまり初体験でほとんどわからない状態のスタートでした。そんな様子がよほどご心配だったでしょう、前同窓会長の渡辺秀雄先生から、「大丈夫？うまくいってるの？」と優しい中にも真剣さを込めた口調で何度もお電話をいただきました。その頃の私は、自分にできるだろうかと不安に思う一方、原稿を集めて印刷屋さんに届ければいいのだろう、と気楽に構えていた面もあり、

のんきなお返事をしたのも今となっては恥ずかしくほろ苦い思い出です。

また、三年後の百周年まではまだ余裕があるとも思っていました、五輪美智子現同窓会長の、「百年を辿るには時間は足りないくらいだよ。今から取り掛かって丁寧な良いものを作りましょう」の言葉に背中を押され、まずは原稿を集める方法を考えるところから始めることにしました。相談の結果、当時連絡が取れたまゆみ会や先輩方の推薦に依拠することとし、必要なテーマや旧職員の方々への依頼は、伝手や名簿を頼りに足を運んだりお電話したりを繰り返しました。そうして集まったおおよそ百の原稿とインタビューの文字起こしは、それぞれが母校や恩師、旧友への愛情にあふれ、記念誌を素晴らしいものとしてくださったことに心から感謝しております。

女学校と旧制中学時代、また多忙な現役世代などの原稿が手薄な年代は、旧制中学時代の校友会誌「鬼園」「眞弓」、高校になってからは戦後復興の若々しい力が生んだ「達高新聞」、「同窓会報まゆみ」「PTA会報白檀」「生徒会誌まゆみ」、分校や定時制の記念誌などからも多数アーカイブとして再掲載させていただきました。それらも記念誌に一層の歴史の深みを添えてくれました。また、個人所有のアルバムや文集などからも大切な思い出をたくさんいただきました。

原稿収集と同時に全体の骨組みの相談も始めましたが、母校の百年を貫く歴史、校舎、三顧の松や前庭、教育方針、行事、部活

動、制服、校歌や凱歌等愛唱された音楽、定時制や分校の変遷、学校を支える地域等々切り口はたくさんあるのですが、それをどんな構成にすれば誰の目にも読みやすく喜んでもらえるのだろうか：そのことは最後まで試行錯誤した課題でもありました。その中で、五輪会長はじめ同窓会の先輩方の意見でもある「百年の連なり」を大切にしようという考えに委員一同共感し、それを具体化するひとつとして、これまでは巻末に資料的に扱った年表を内容も充実させて巻頭に置いたらどうかというアイデアは、全体を貫いた方針となりました。編集盤に『安達百年』という記念誌の題名が決定してからそれは一層はつきりしたものになり、皆様からおほめ戴いた装丁のイメージにもつながりました。

現在の学校の校舎や生徒の活動に関する内容は、主に同窓生の先生方が編集に関わってくださいることになり、特に生徒さんの書やイラストを多数使わせていただけたことは、記念誌に若々しい息吹を与え、母校の未来に希望を感じるものとなりました。

この光栄な執筆の機会をいただいたことで、記念誌編集という役割が私の人生に温かい恵みを与えてくれたことをあらためて感じる事ができました。感謝いたします。



平均寿命が全国で最も長い

川崎市麻生区での私のお仕事



森 淳子(旧姓菅野)(昭和60年卒)

このたび東京まゆみ会幹事を仰せつかりました森と申します。微力ながら何かお役に立てればとお引き受けいたしました。精一杯務めさせていただきますので、会員の皆様、何卒宜しくお願いいたします。

さて、私が住んでおります川崎市麻生区は、男女ともに平均寿命が全国で最も長い(男性84.0歳、女性89.2歳)と昨年厚生労働省より発表されました。(※「令和2年市区町村別生命表」より)しかし、記事を読み進めていくと「7行政区の中で65歳以上の割合が約24%、75歳以上は約13%と川崎市内で最も高齢者の割合が多い」とも書かれており、果たしてこれは素直に喜んで良いものだろうかと考えてしまいました。

私、看護の職についており、この川崎市麻生区に位置する病院の特に透析など腎不全分野に深く関わりを持つ職場でお仕事させていただいております。その職場では血液透析を受けていら

っしゃる患者さんの治療が安全・安楽に遂行されるお手伝いや、ご自宅で腹膜透析をされている患者さんの治療がうまくいくようにサポートをすることが主な業務とさせていただいておりますが、これから透析が必要となる慢性腎不全の患者さんに、今後の治療をどうしていきましようかと言った「腎代替療法選択」の相談事をする機会があります。

この相談の中で、対象となる患者さんの生活背景や治療に対してのお気持ちなどの聞き取りをすると同時に、腎不全とは：透析とは：(時には腎移植とは：も)と言った情報提供を行い、その方が生きていかれる上で最善の治療を選択できるようお手伝いをさせていただくという内容のお仕事なのですが、その方々の中には90歳台で透析を導入される方も少なくありません。日本透析医学会による統計から、ここ20年において透析導入平均年齢が63歳台から71歳台に徐々に上がってきているのを目にし、当職場でもそれに違わない現状があり、高齢化の波が押し寄せている感はありません。

治療選択する上でお話を伺っておりますと、ほとんどの方が「このまま(保存期腎不全)で透析はしたくない」とおっしゃいます。理由を伺うと、ここ数年保存期腎不全で過ごしているからこのまま導入しなくても過ごせるかも：とか、透析は末期腎不全における最終的治療とされており導入されたら生きている限りは継続せねばならない治療となるため、やはりどうしてもご自身の予後が想像されてしまうこと、血液透析での時間の制約や過

去に治療がうまくいかなかった方からの体験談から、いまさらそんな辛い思いをしたくない…などなど、中には生かされているのが嫌だというお考えの方もいらっしゃいました。そのような方々に対し、透析を導入しないことで起こりうるリスクのお話、各治療の詳細やメリット・デメリットのお話、これらをご理解していただけるよう説明させていただき、透析に対して誤解されている部分の修正を行いつつ、ご自身が最善の人生を送れるような治療を選択していただき「透析を始めてよかった」と感じていただけるよう、日々「腎代替療法選択」の場に臨んでおります。

医師から「透析が必要なので透析をしましょう」と患者さんの意思が尊重されず(多少語弊がありますが)治療決定されていた時代から、現在は患者さんも治療選択に関与して治療を決定していく時代となりました。なおかつ、治療がうまくいくだけでなく、患者さんの人生目標が達成できるようなケアを提供していく質の高い看護が求められている時代となりました。

この職に就いてから優に四半世紀は越えていますが、私が新人だったころには「お医者様のいう通り」がまかり通っていた時代だったな…と良くも悪くも懐かしく思うこの頃です。

ちなみに、我が家には3人の娘がおります。親の背中を見てか見ないでか誰一人として看護師になる子はおりませんでした。子どもたちも何か思うところがあったのでしょうか…。

最後に…先日、唯一自分で稼いでいない三女から母の日のお

花のプレゼントをもらいました。稼いでいる子どもたちは…ま、何か思うところもあったのでしよう…そのステキなお花の画像を添えて会員の皆様様の益々のご活躍をお祈りしつつ、拙い文章による現状報告を終わりたいと思います。

最後までお読みくださり誠にありがとうございました。



「博士というキャリアについて」

〈高校・大学(院)・教員・研究者〉



武田 晃司 (平成17年卒)

東京まゆみ会員の皆様、福島県立安達高校関係者の皆様、第36号会報をお手にとつて読まれている皆様、後輩の方々、初めまして。東京まゆみ会の先輩からのご指名を受け、僭越ながら会報に寄稿させていただきます。また、若輩者ではありますが、今後の東京まゆみ会を盛り上げるために貢献してまいりますので、今後ともよろしくお願いいたします。今回は、自己紹介をメインに書かせていただきました。

私は現在、茨城県つくば市にあり、国立研究開発法人農業・食品産業技術総合研究機構（農研機構）にて、研究に従事しております。農研機構といっても馴染みがない方も多いかと思いますが、『シャインマスカット』や『ひかるシルク』などを開発した、農業に関わる研究・開発を行っている国立の研究機関です。

【安達高校と私、強力な受験対策】

話は、私が安達高校に入学したところから始まります。当時、特にこれといってやりたいこともなく、しかし高校入試の面接で、将来は医者になりたいと言ってしまったために、入学後すぐに五輪先生（当時学年主任・現同窓会会長）に目をつけられ

てしまいました。高校一年の一学期中間考査で真ん中あたりの成績をとった私は、その直後に職員室に呼ばれ、五輪先生から叱咤激励を受けたのでした。「おまえさん、どうするんだ？」いつも五輪先生が私に投げかけてくれる叱咤激励の言葉はコレだけでした。「こんな成績じゃダメだ。」とも言わず、「あーしなさい、こーしなさい」と言う指示も無く、その言葉の意味は「自分で現状を分析して、考えて、決断してきなさい」という意図だったと思います。

「おまえさん、どうするんだ？」の質問に対し、私は「勉強します」と答えました。そう答えを聞いてからの五輪先生の対応は迅速で、各科目担当の先生に個別指導の了解を取り付けていただき、その上で、現代文から古典漢文までを五輪先生自ら指導をしていただきました。

個別の取り組みとは別に、学年の取り組みとして早朝と放課後にも受験対策用の課外授業を設けていただき、充実した支援を行なっていたいただきました。高校三年間は塾と予備校も並行して通いましたが、一番力がついたのは安達高校の先生方からのご指導・支援のおかげだと深く感謝しております。

【研究者になるには？「回り道ばかりの学生時代」】

医者になりたいと言ったものの、高校で色んなことを学んでいく中で、“先天性の病気について研究してみたい、遺伝子について深く知りたい”と思うようになり、進学先を探しました。しかし、高校生の自分にはどこに進学したら良いのかイマイチわかりませんでした。医学部や薬学部ではヒトの研究はできても病院実習や国試の勉強も大変そうだし、農学部や獣医学部では家畜の世話や農業実習もあるだろうし・・・などと悩んでい

ました。とりあえず色々な大学を受けまくって全敗したので、浪人することにしました。浪人中に、学習院大学に《理学部では二〇〇九年四月に新学科「生命科学科」を開設し、分子細胞学を基盤として、DNA、RNA、タンパク質など、生体高分子の分子レベルでの教育・研究から、細胞の活動や動物・植物の個体発生などの生命現象を幅広くカバーした教育・研究を行う。》という話を聞き、これだ！と思う、まだ学科が出来ていなかったもので、化学科に進みました。その後、学部四年時に偶々、生命科学科の発生遺伝学研究室に入ることができました。化学科時代は生物学の授業はほとんど受けていないので、研究室配属後にゼロから生物学の勉強をスタートし、最終的には少し時間はかかりましたが博士（理学）を取得し、研究者のキャリアをスタートすることができました。

【紆余曲折〜まだまだ続く博士のキャリア〜】

私は、学部から教員（助教）までの期間を合わせると十六年間大学におりましたが、博士のキャリアは研究と教育だけではなはず、何か他のキャリアにも挑戦してみたいと考えて、新潟大学のURA（リサーチアドミニストレーター）に転職し、研究費獲得支援や世界大学ランキングの分析などを担当しました。その後、総務部企画課へ移り大学経営に関する情報分析や企画立案などに携わりました。さらに、博士になったことで色んなご縁に恵まれ、農研機構に転職しました。我々のグループでは未利用昆虫の生物機能を活用するために、アメリカミズアブという昆虫の遺伝子の研究やゲノム編集技術を活用した研究に取り組んでいます。

【後輩達へ「おまえさん、どうするんだ？」〜】

これまでの経験全てが仕事をする上で活かされており、何事にもチャレンジしてみるものと常々思われます。最近、国家資格キャリアコンサルタントも取得し、ボランティアで大学生や大学院生の進学・キャリア相談を受けています（もちろん高校生も無料）。その時によくする話は、「あなたは、どうしたいの？」と聴くことや、そのためには「自分で現状を分析して、考えて、決断することが必要だよ」とアドバイスをするようにしています。まるで誰かの指導方法をそのまま引き継いでいるかのようです。興味があればご連絡ください。

最後に、安達高校の後輩達へのメッセージですが、「あなたは、どうしたいですか？」。ぜひやってみたいことを自分で決めてみてください。しかし、何かを選択するにも、知識や経験が多い方が、あなたに合った選択肢を得られやすいと考えられます。なので、勉強も大事ということです。（↑ここが本当に大事）もし、迷ったり、困ったりした際には、先生方に相談するのもよし、まゆみ会の先輩方を頼るのもよしだと思います。関東に來た際には、東京まゆみ会でお会いしましょう。



なんでも
相談



連絡先

「師弟同行」

菅野 育夫(昭和51年卒)



昨年三月、四十年勤めた都内の私立高校を定年退職した。在職中の二十八年間剣道部の顧問をし、管理職になっても剣道部とはずっと関わってきた。

先日、うれしい報告が届いた。剣道部の教え子の一人が剣道七段に合格したというのである。多くの教え子の中で初めて七段に合格したのである。

現在の剣道の最高位は八段である。七段は全国で一万数千人いるが、八段は別格で全国で数百人しかない。したがって七段はアマチュアの最高峰といえる。しかし、簡単に昇段できるわけではない。定められた修行期間を経ないと次の段位を受審できないのである。二段の受審は初段合格後一年、三段は二段合格後二年経たないと受審できないのである。(別表を参照)八段にいたっては七段合格後十年経過しないと受審できない。七段に合格するには初段から最低でも二十一年かかるのである。高校生で三段をとっても七段までは最低十五年かかる。彼の場合一時剣道から離れていた時期もあり、高校卒業後三十年の月日が流れたのである。

私が竹刀を握ったのは十歳。自分から進んで始めたわけではなく、当時剣道六段だった父から有無を言わせず

やらされた。しかも、近くに道場はなかった。もっぱら稽古場は家の庭、父親が相手だった。日が長い季節はいいが、日暮れが早い時は裸電球ひとつ、冬の寒い日は雪のちらつくことさえあった。屋根があつて、板張りの床で稽古ができるようになったのは中学に入学してからだった。中学校一年の時は父が顧問だったが、二年の時に転勤したため二年以降指導者はいなかった。それでも個人戦で何とか安達郡代表の二名に入り、県大会まで進みベスト一六で優勝者に敗れた。

安達高校時代も剣道部だった。残念ながら安達高校にも剣道の指導者はいなかった。それでも三学年上の先輩と二学年上の先輩は個人戦で全国大会に出場していたので練習レベルはそれなりだったのだと思う。指導者はいなかったが幸いにも二本松剣友会の先生方を知っていたので、今村元先生からお願いしてもらい定期的に指導に来ていただくことができた。我々の代も全国を目指し頑張ったものの、所詮指導者のいる学校には力及ばず一年二年と県北大会すら突破できなかった。三年時、初めて県大会に出場できた。団体戦は予選リーグで敗退したが同期の野地が個人戦でベスト四まで進み、全国大会まであと一歩だった。指導者がいれば稽古は厳しくなったであろうが、勝利の喜びも味わえたに違いないと今更ながら残念に思う。私たちが卒業後は、剣道を専門に学んだ体育の教員が赴任するようになって剣道部の成績はすこぶるあがった。個人戦、団体戦でも全国大会に何度か出場している。

大学でも剣道を続けた。しかし、昭和五十五年(一九八

○年）の春のある朝、左股関節に激痛が走り身動きすらできない状況になった。受診すると「左股関節骨軟骨腫症」と告げられた。軽い気持ちで整形外科を受診したのだが手術が必要と、それもあり大がかりな手術であるとのこと。三つの病院を回ったが結局この病院の結論も同じだった。万が一悪性の場合には左足切断とまで宣告された。手術直前の稽古ではもう剣道ができなくなるかもしれないと思うと涙が流れた。幸い良性だった。手術、リハビリと復帰まで約半年かかった。医者からは水泳以外の関節に体重のかかる運動は禁止といわれたが指示に背いてその後も剣道を続けてきた。

教員の道に進むきっかけは、大学での剣道の先生との出会いが大きかった。技術者になりたいと工学部を選んだのだが、ある先生の「菅野は教員が向いている。教員になれ。」の一言で進路は決まった。折角教職に就くなら、教科指導はもちろんであるが、剣道部の顧問になりたかった。生徒には自分の高校時代のような指導者がいない寂しい思いをさせたくなかったのである。

顧問時代は、試合で勝たせたいのはもちろんであったが、卒業後どこで剣道をやっても恥ずかしくないものは身につけて送り出したかった。そんな思いで生徒と稽古してきた。自分が昇段しなればと思うようになったのは、生徒を連れて外部に行った時である。練習試合に行くとは段位が上の教員が取り仕切ることが多かった。生徒たちは何とも思っていなかったかもしれないが、生徒に肩身の狭い思いをさせたくない、本格的に段位取得に取り組んだ。それまで生徒との稽古中心だったが、生徒との

段位審査規則	
初段	中学校2年生以上の者
二段	初段受有後1年以上
三段	二段受有後2年以上
四段	三段受有後3年以上
五段	四段受有後4年以上
六段	五段受有後5年以上
七段	六段受有後6年以上
八段	七段受有後10年以上 年齢46歳以上の者

（全日本剣道連盟段位審査規則）



稽古を終えてから道場に通い昇段を目指した。それでもなかなか合格できず何年かかかってようやく六段取得。その後七段に合格したのは四十三才のことである。

退職時には多くの卒業生が集まって送別稽古会を開催してくれた。しかし、過去に手術した股関節も寿命だった。痛みの影響で稽古どころか、歩くにも足を引きずる始末。思うような稽古はできなかった。決心して今年、令和六年三月人生二度目の股関節の手術をした。

先日、教え子たちが昇段を目指しての稽古会をやりたいと言い出した。術後初めて面をつけた。まだまだ自由に動ける状態ではないが、卒業生や現役生とようやく稽古ができるまで回復できた。

これから先、卒業生の昇段を見届けたいし、自分自身もまだまだ八段にも挑戦してみたい。身体が動く限り教え子たちと竹刀を交えていきたいと思う今日この頃である。

卒業生に手ぬぐいの文字を書いてほしいと頼まれた。「師弟同行」の四文字を書こうと思っている。

写真で見る 総会・懇親会2023

2023. 10. 14 スクワール麹町



参加者全員で記念撮影



会長代行で挨拶する
阿部副会長



佐藤新会長



伊藤 安達高校長



同総会五輪会長



来賓の皆さんと



二人の名司会者



S 3 4 卒の元気な先輩達





校歌 覚えてましたか？懐かしい校歌を皆で歌う

皆さんいい顔してますねえ



好評だった変面ショー



福島民報 佐藤氏



閉会の挨拶 平子副会長



新役員を勧誘？

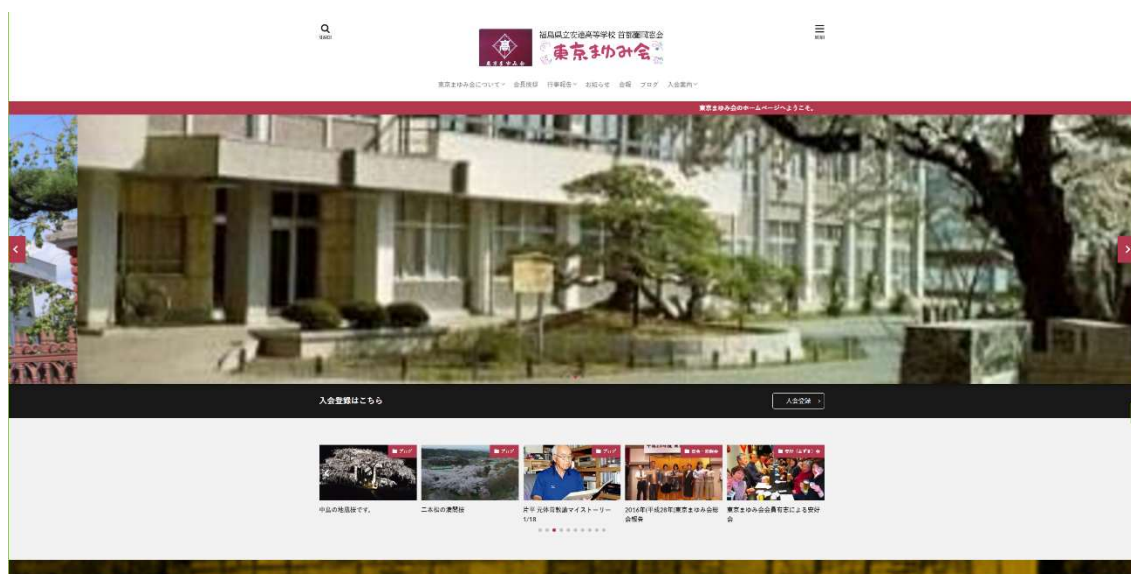


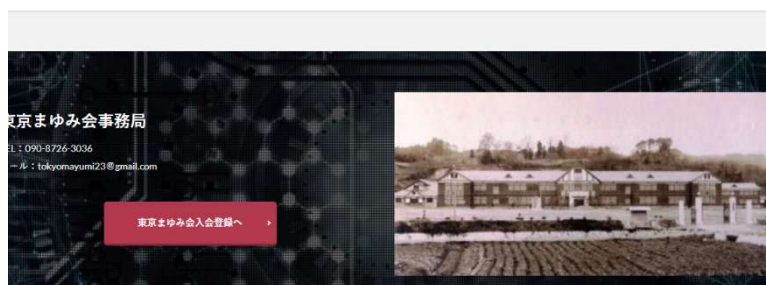
東京まゆみ会ホームページを公開しました！

二〇二四年三月十日に東京まゆみ会ホームページを公開いたしました。公開にあたり、皆様からの多大なるご協力をいただきましたことを御礼申し上げます。

東京まゆみ会ホームページを作成するきっかけのひとつとして、当会の今ある最大の危機、会員数の減少にありました。ソーシャルネットワーク（エックス（旧ツイッター）・フェイスブック・ライン）の公式ページも同時に立ち上げております。

スマホからも簡単に登録できますので皆様からの拡散を期待しております。





現在ホームページの更新は、月二回を最低目標として頑張っておりますが、なかなか新しい記事を見いだすことができません。そこで皆様の近況等を募集しております。内容や文字数は問いません。ほんの数行でもかまいませんので、ご一報いただければ幸いです。（ホームページ「掲載記事を募集中の詳しくはこちら」をクリックして下さい。）

*ホームページのワードは、「まゆみ会」または「東京まゆみ会」です。

<https://tokyomayumikai.com/> 会

東京まゆみ会が

「福島民報」で紹介されました！

母校の創立100周年と会の設立75周年を祝い、絆を強めた東京まゆみ会の会員ら



安達高100周年

東京まゆみ会75周年

節目の年絆強める

安達高（二本松市）の首都圏の同窓生でつくる東京まゆみ会は東京都千代田区のスクワール麹町で総会を開いた。母校の創立100周年と東京まゆみ会の設立75周年を迎え、節目の年に改めて絆を強めた。

4年ぶり 集 母校応援誓う

同会は1948（昭和新任された佐藤富美和23）年に発足し、現夫会長が「これからも在は約300人の会員盛会に続けていけるよが所属する。コロナ禍を経て4年ぶりの集いで、約60人が出席した。高橋智章会長に代わり阿部伊勢吉会長代行があいさつし、五輪美智子安達高同窓会長、伊藤勝安達高校長が祝辞を述べた。役員改選

懇親会を開き、新会員紹介に続いて安斎隆顧問（東洋大理事長・セブン銀行特別顧問）の発声で乾杯した。近況を語り合い、アトラ

会館で行われる。後1時から二本松市民

安達高 創立100周年

未来につなぐ
まゆみの秋

■題字 ■東京まゆみ会顧問 安斎 隆さん

二本松市の安達高は今年、創立100周年を迎えた。1923（大正12）年に県立安達中学校として開校し、3万人を超える卒業生が巣立った。校章にかたどられた「まゆみ」のように、強くなやかな「まゆみの精神」を受け継ぐ。28日の記念式典を前に、各界で活躍する卒業生と、勉学に励む在校生の姿を紹介する。（文中敬称略）

「安達のまゆみ古（いに） 同窓生が集まったのをききしえの 歌によまれし跡遠し」

声を合わせて懐かしい校歌を歌う。14日、東京まゆみ会は設立75周年の総会を都内で開いた。同窓生ら約60人が4年ぶりに集い、交流した。

安達高の同窓生でつくるまゆみ会は各地にあり、東京まゆみ会は戦後、復員の

伝統の母校発展誓う

ている。総会で乾杯の発声をした元会長で顧問の安斎に思う」と胸を張る。

安斎は高校時代、現在の京東会長は「万葉集の二本松市上川崎の自宅から磐梯山などに登った。地

歌を引く伝統の校歌を誇り

安達高まで約6キロの道を徒歩や渡し舟、バスで通学した。山岳部で安達太良山や

磐梯山などに登った。地

まゆみ会



4年ぶりに集い、声を合わせて校歌を歌う東京まゆみ会の同窓生ら＝14日、東京都千代田区

図を読むのが好きで、物事を俯瞰（ふかん）的に見るようになった」と懐かしむ。東北大学法学部の在学中に司法試験に合格。卒業後は日銀に入行し、理事などを歴任して日本の金融の中核を担った。経営破綻（はたん）した日本長期信用銀行（長銀）の処理に当たった後、アイワイバンク銀行（現セブン銀行）社長に就いて新しい時代の金融機関像を示した。今は東洋大理事長、セブン銀行特別顧問として人材育成に力を注ぐ。「安達高はのびのび切磋琢磨（せっさたくま）できる環境だった。近くのお城山の『戒石銘』は、自分の規範となった」と振り返る。

安斎の親友で同級生の安藤勇夫（83）は、1959年卒。東京まゆみ会の元会長。見せる。安達高は友人や同期のつながりが強い。これからもまゆみ会が母校の発展に尽くしていく」と意欲を

東京まゆみ会会則

第1条 本会は、「東京まゆみ会」と称し、事務所を首都圏に置く。

第2条 本会の会員は東京を中心に広く在住する福島県立安達中学(旧制)、同安達高校(併設中学、本校および旭・針道・小浜・岩代・渋川・石井・大平の各分校定時制課程、夜間過程を含む)ならびに二本松実科高女、福島県立二本松高女、同安達女子高校の卒業者、同関係者で組織する。

第3条 本会は会員相互の親睦と共栄を図り、併せて母校の隆盛発展に寄与することを目的とし、そのために必要な諸般の事業を行う。

第4条 本会は次の役員を置く。任期は2年とし、再任を妨げない。

第5条 会長1名、副会長若干名、事務局長1名、会計1名、常任幹事10名以内、会計監査1名、幹事20名以内。会長は本会を代表し、会務を統括する。副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。事務局長は会の運営を円滑にするため、事務上における全般を遂行する。会計は本会の金銭出納、会計管理をする。常任幹事は会務を分掌、幹事とともに会の運営に当たる。会計監査は会計を監査する。

第6条 会長、副会長、事務局長、会計、会計監査、常任幹事(以上を常任役員と称する)は、総会において選任し、幹事は、常任役員会で選考のうえ会長が委嘱する。なお、補欠として選任された役員は、前任者の残任期

間とする。

第7条 幹事会が必要と認めた場合、諮問機関として顧問を置くことができる。

第8条 総会は年1回、臨時総会は必要に応じ会長が招集する。総会では常任役員(※幹事以外)の選任、会則の変更、会計の承認、会計監査の報告、その他重要事項を決議する。

第9条 総会の議事は、出席会員の過半数をもって決し、可否同数のときは議長の決するところとする。

第10条 幹事会および常任役員会は、必要に応じて会長が招集し、総会に次ぐ重要事項や緊急事項を協議する。

第11条 本会の経費は、会費、寄付金などをもって充てる。会費は年額2000円とする。

第12条 本会の会計年度は8月1日に始まり、翌年の7月31日に終わる。

第13条 本会の事務執行に関する細則は、幹事会で決定することができる。

(付則)この会則は、昭和48年4月1日より施行する。

(二部改正)

平成8年	9月15日
平成13年	9月9日
平成16年	8月3日
平成22年	8月29日
平成27年	8月30日
平成30年	10月13日

令和五年度年会費納入者ご氏名

令和6年7月20日現在

(卒年)(敬称略)

昭 39	昭 38			昭 37	昭 35			昭 34	昭 33		昭 32	昭 30	昭 29	昭 28	昭 27	昭 26	昭 26	昭 25	昭 23					
山崎民子	大関美智子	遠藤禎一	渡辺峻志	早川ミツ	最上茂	長田伸子	山本紀夫	藤田孝男	熊田聰男	伊藤定男	安斎隆	岡安男	保坂弘子	紺野英男	石郷岡重臣	本田茂	菅野寛雄	國井那智子	石井壽子	安斎正敏	山野井伸子	遠藤修	糠沢ジョセフ・J	巻山寛
吉田史郎	田仲トヨ	佐藤利春		古谷修一	熊谷紀子	渡辺紀雄	風間章	渡辺浩司	三浦利榮	澤井信明	氏家盛通	安斎宏		前田長	佐藤邦英	大河内健次	宮田陽三	菅野博	撞井ヨウ子	菅野睦子	栗原絹子		菅野明	二平満男
	中根圭子	嶋原秀夫		遊佐莞次	佐久間哲		神野宗介		三浦英夫	田中清勝	移川栄二	安藤勇夫		武藤國造	諏訪親太郎	大島庸世	油井文子	斎藤俊行	諸根靖忠	斎藤善夫	小林久		作田文弥	
	山口弘二	山口		渡辺栄喜	高場稔		高済博彦		水野イク	丹野朝二	狩野博	市川久男		横島享子	西山洋子	小林哲子		蓮見隆			武藤長允		鈴木衛	

(卒年)(敬称略)

昭45	昭49	昭48	昭47	昭46	昭45	昭44	昭42	昭41	昭40	昭39	昭38	昭37	昭36	昭35	昭34	昭33	昭32	昭31	昭30	昭29	昭28	昭27	昭26	昭25	昭24	昭23	昭22	昭21	昭20	昭19	昭18	昭17	昭16	昭15	昭14	昭13	昭12	昭11	昭10	昭9	昭8	昭7	昭6	昭5	昭4	昭3	昭2	昭1	昭0																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														
佐久間秀幸	渡辺末次																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																														

(以上141名)

総会・懇親会初参加者

現在の役員体制

令和6年7月20日現在(卒年順)

【顧問】	安斎 隆(昭34)	安藤 勇夫(昭34)
【会長】	高橋 智章(昭41)	
【副会長】	佐藤富美夫(昭45)	平子 杉代(昭49)
【事務局長】	阿部伊勢吉(昭45)	
【会計監査】	山田由美子(昭51)	
【常任幹事】	菅野 育夫(昭51)	
【幹事】	大内 正造(昭48)	
	渡辺 弘次(昭45)	
	早川 ミツ(昭37)	百川 教彦(昭50)
	穴戸 岩(昭60)	
	山崎 力(昭51)	菅野 孝三(昭50)
	森 淳子(昭60)	喜古 康博(昭60)
		以上

会からのお願い

☆新会員ご紹介のお願い

本会は、入会の申し込みを常時受け付けております。

同期・先輩・後輩の方に入会を希望される方がいらつしやいましたら、本会事務所宛て、もしくは、当会役員に、氏名、卒年、住所、電話番号をお知らせ頂きたく、宜しくお願い致します。

なお、新会員の方は、入会年度の年会費は免除と致します。

編集後記

今年【会員からのお手紙】

○四〇四月十日の日、裏庭の“みかんの木”からアゲハチョウが三羽飛び、他から二羽飛んできて五羽飛んだ！うれしい！（今年）は暖かな日が続いたから羽化が早いのかもね！

○二〇二年前の事。庭に行ったら“うんち”の匂い。後日猫が来、私が居たので草の陰に居た水飲みに来るのは良いが“うんち”はしないですね！とお願いした。その後うんちはしなくなりました。お皿に水は小鳥のために置いています。

(昭和37年卒の早川ミツさんより投稿)

昭和5年

安

安達高校は昨年百周年を迎えました。私たちが歩んできた歴史の上に、また新しい歴史が刻まれていくことでしょう。東京まゆみ会も昨年、四年ぶりに総会・懇親会が実施できました。あと四年で東京まゆみ会も八十周年を迎えます。若い卒業生を勧誘し益々活発な東京まゆみ会にしていきましょう。

《会報編集》東京まゆみ会事務局 菅野育夫

東京まゆみ会 会報 第36号

発行人 東京まゆみ会 会長 佐藤 富美夫

〒332-0016

埼玉県川口市幸町1-2-30-602

電話・FAX 048・256・1616

印刷所 モリモト印刷株式会社

〒162-0813

東京都新宿区東五軒町3-19

電話 03・3268・6301(代)